

9月例会

# 四国讃岐探訪の旅

平成 3 年 9 月 22・23日実施



主催 備陽史探訪の会

## 見学日程

9月22日

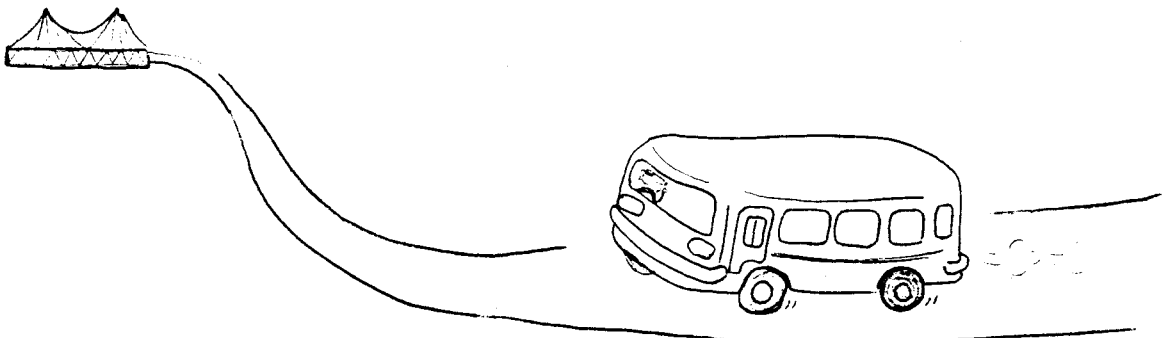
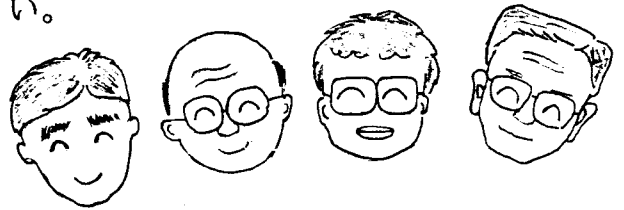
福 山—福山東I.C—早島I.C—与島P.A—坂出I.C—丸亀城—  
 8:00 9:05 9:25 10:00 11:00  
 -善通寺(昼食)—善通寺市立郷土館—王墓山古墳—宮ヶ尾古墳—  
 11:20 13:20 13:30 14:00 14:10 15:10 15:20 16:10  
 -神谷神社—白峰寺—坂出(泊) 坂出簡易保険保養センター  
 16:15 17:00 17:30 18:00 18:10

9月23日

坂出簡易保険保養センター—高松城跡—高松港県営棧橋〜〜女木島港<sup>現地バス</sup>  
 8:30 9:00 9:30 9:40 10:00 10:20 10:25  
 -鬼ヶ島洞窟—女木島港〜〜〜高松港県営棧橋—栗林公園(昼食)—  
 13:20 13:40 13:50 15:00  
 -四国村—高 松—坂出I.C—早島I.C—福山東I.C—福 山  
 15:25 17:00 18:05 19:00 19:25

## 注意事項

- ① 団体行動ですので集合時間等、本部の指示にしたがってください。
- ② 困ったことや異常がありましたら直ちに本部へお知らせください。
- ③ ゴミは所定の場所に捨ててください。



## 丸龜

丸龜の地名の由来は応仁年間、今から五百年前の室町時代、奈良元宇と云う武將が内龜山に城を築いたのに始まり、それがいつの日か文字が変わり、丸龜と呼ぶ様になった。

## 丸龜城

渦率と環郭式平山城、慶長三年(1597年)豊臣秀吉家臣生駒親正が築城  
其の後 寛永十八年(1641年)山崎家治が入城 完成した万治元年(1658年)赤松高知  
が入城 明治維新まで 赤松家 五万石の居城であった。

扇の勾配と呼ばれる美しい曲線を入かいた石垣は清正流三日月と呼ばれる名である。

頂上本丸に建つ三層三階の天守閣は江戸時代天守の典型といえる層塔型天守である。

- 天守(三層三階 江戸時代初期)
- 大手一の門(櫓門 寛永十年1670年)
- 大手二の門(高麗門 江戸時代初期)

◦柿むしろ割 飯の山割 今昔 高沢虚子  
◦人麿の馬矢おにしとおもつ 吉井勇  
海の彼方の沙弥島を見る

善通寺市の南部に広がる谷には、その奥部である西側から東側に向かって七基の前方後円墳が築かれている。

順に、北原古墳・菊塚古墳・王墓山古墳・北向神社古墳・鶴方峰1・2号墳・遠藤塚古墳、がそれらである。

王墓山古墳を除いて正式な発掘調査が行われていないので、詳細は不明であるが、剝抜形石棺（善通寺市立郷土館収蔵）の出土している①遠藤塚古墳がその古墳群のなかでも一番古いものと考えられ、古墳時代前期に築造されたものと言える。

続いて、前方部が広がらない墳形を持ち、竪穴式石室を持つと言われる②鶴方峰1号墳や③同2号墳、④北向神社古墳、⑤王墓山古墳、等のグループが築造されたと推定されている。

このうち、王墓山古墳は全長45mの前方後円墳で、横穴式石室が確認されているが、多くの金銅製品や玉類が出土している6世紀前半築造のものである。それだけでなく、石室内には石障という特別な板石の埋葬施設（九州地方に多い）が見つかっており、注目される古墳である。

さらに、平地に立地する⑥菊塚古墳や⑦北原古墳が続くものと考えられる。

このように、有力な首長墓と考えられるこうした前方後円墳が連続して築かれていることから、古代においてこの一帯が重要な地域であったことが推測されるのである。

また、この谷の南側には横穴式石室を持つ宮ガ尾古墳がある。この古墳は昭和41年に偶然発見されたものであるが、石室長約4.5mのその奥壁西側に線刻画が描かれていたことで有名である。6名の人物、船・騎馬人物・船・人物の順に描かれており、被葬者への鎮魂の意味を持つものと推測されている。

このほかに善通寺市内には、盛り土の代わりに安山岩を用いて文字通り石を積んで築いた積石塚があることも注目される。先程の遠藤塚古墳などよりも古い古墳として、野田院古墳、経塚古墳、椀貸塚古墳、丸山1号墳の前方後円墳が存在している。

# 善通寺

真言宗善通寺派総本山。正式には<sup>おんつうじ</sup>屏風嶺五岳山善通寺誕生院と称し、空海(弘法大師)誕生地といわれている。本尊薬師如来坐像。四國霊場第7番札所。807年(大同2)唐から帰朝した空海が長安(現西安市)の青竜寺の仏閣を模して、813年(弘法4)を26年の歳月を費やして建立したといわれ、真言宗最初の根本道場とされる。

寺名は、空海くわいの父佐伯直田公善通さねと御の名をとって名付けられた。創建当時、四町四方の境内には金堂、大塔講堂、法華堂、西塔、護摩堂などが並び建ち、四九院の僧房があったといわれる。それ以前に前寺があったことが発掘調査で確認されている。その後、鎌倉、南北朝時代と幾度か衰微、荒廃を繰り返したが、後宇多天皇の勅諭、同寺中興の祖と称される宍範しつはんの努力によって修理造営が進んだが、1558年(永禄1)三好・香川両氏の戦火で堂塔伽藍はすべて焼失。その後、讃岐領主生駒親正や初代高松領主松平頼重、丸尾領主山崎謙治、赤松高和らの力添えによって次第に復興し、往年の姿を取り戻し、代々の住職の努力も加わって今日の姿を整った。

現在の善通寺は東西二院に分かれ、東を東院ひがしまたは伽藍と称し、西を西院または誕生院と呼んでいる。東院には金堂を中心とした五重塔、常行堂、五社明神、佐伯八幡、三帝御廟、善女竜王社、天満宮、法然上人逆修塔、足利尊氏利生塔などがあり、南に大門、東に赤門、西は中門を経る西院に通じている。西院には王門を入って正面に御影堂、供養塔、奥殿、その南側に宸殿、いわば会館、晴雲殿、如雲殿、庫裡、宝物館、書院、奥書院、茶室などが付属建物からなる本坊で、その正面が勅使門、北側には志霊堂、地藏堂、護摩堂、十王堂、観音堂および茶室がある。西院の西門正覚門を出ると濟生橋があり、駐車場の向かいには小高い香色山があり、山頂には愛染不動明王が鎮座、中腹には稻荷社、麓に88ヶ所がある。この香色山に連なる筆の山ふで、飛騨師山、中山、火上山と五つの峰が屏風を立ち上るようそびに聳えており山号と成った。

歴代天皇の崇拝<sup>かんじ</sup>多く論旨。院宣<sup>かんじ</sup>及び(ば)は(賜)り空海の作品や遺品、寺宝も多く。  
「一字一仏法華經序品」、「金銅錫杖頭」は国宝、木造地藏菩薩、木造吉祥天立  
像は重要文化財に指定されている。

# 善通寺市立郷土館

## 郷土館の沿革

善通寺市は讃岐古代文化発祥の地として県内外より注目されている。昭和27年に文化財保護条例をつくり、昭和32年には旧陸軍の施設を市役所構内に移転して「文化財陳列館」を開設した。昭和37年10月3日には善通寺市立郷土館設置条例を制定し「市立郷土館」と改称した。そして昭和55年6月25日偕行社を改修復元することによりその面目を一新した。偕行社は明治36(1903)年5月新築落成したもので木造平屋建寄棟で面積は530.5平方メートル(193.5坪)、大正11(1922)年11月16・17日の両日陸軍特別大演習のため摂政宮殿下(今上陛下)が御仮営所として御宿泊された由緒ある明治建築である。

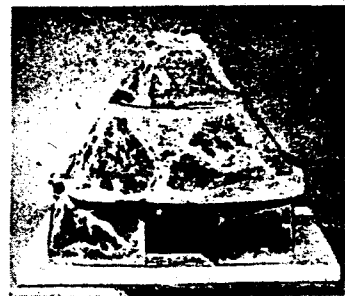


市立郷土館

## 展示品の概要

### I 考古資料

- 旧石器時代：石器(102)
- 縄文時代：石器(85)、土器(47)、土偶(1)、獣骨(8)
- 弥生時代：石器(236)、土器(71)  
銅剣(3)、銅鐸(複製品1、写真1)  
瓦棺(4)
- 彼ノ宗遺跡出土品(150)
- 善通寺西遺跡：榧(2)、土器(43)、写真(4)



家型埴輪

- 古墳時代：石棺(2)、甕棺(3)、家型埴輪(1)、  
壺(2)、宮が尾絵画古墳拓本(1)、  
円筒埴輪(4)、骨壺(5)、副葬品(6)、  
石棺石枕(複製品)(1)



宮が尾古墳の絵画(舟)

- 白鳳時代：仲村廃寺遺跡出土品(20)

地下の横穴式古墳で全長約9メートル、奥壁に線刻で騎馬武者や舟が画かれている。壁画は内容が豊富で優れている。全体として何を表現しているのだろうか。ロマンに富んだ絵画である。

## Ⅰ 歴史資料

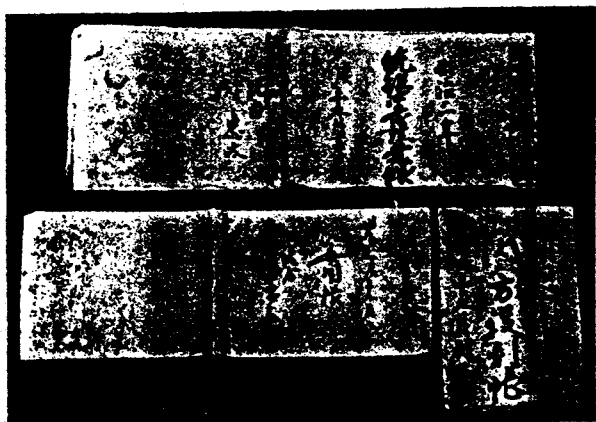
- 軸物（善通寺一円保差図、通行手型、屏風浦八勝地図、古瓦拓本）
- 神社（木熊野神社御由留輪、的板、古語録）
- 寺院（善通寺五重塔供養札、宗門改帳、富くじ）
- 古文書（高口家外数十点）
- 藩札及び各種通貨 ○板木
- 各種出版物



善通寺村絵地図

明治のはじめ名東県(徳島県と香川県が合併)時代につくられたもので五岳の南山麓、善通寺、大池などを中心に描き当時の字名と戸数が記入されている。貴重な資料である。

(神原家提供)



木熊野神社(中村町)統屋控帳

## 民俗資料

- 生活用具・副業用具
- 耕作具
- 生活調度品
- 収穫調整具
- 教育関係資料
- 消防器具
- その他の関係資料
- 宗教用具



らんびき



箱膳

### 箱膳

指物膳の一種。ふた付きの箱に1人分の食器を納め、食事の時には蓋を裏返して盆とした。家族の人数だけ整えられ大小がある。

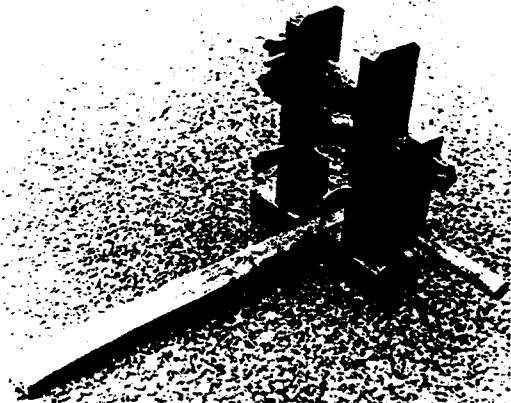
### 蘭引(らんびき)

酒、香料、葉などをじょうりゅうする器具でポルトガルから伝わり、江戸時代に用いられた。漂流船などで水が欠乏した場合も鍋、釜などを利用してじょうりゅう水を得たという。

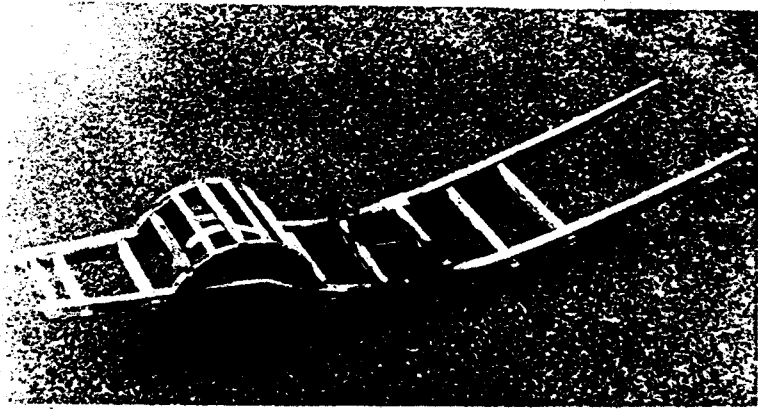
### みとり

麦稈真田(ぼっかんさなだ)は、むぎわらをさなだのように編んだもので夏帽子を作るのに使われた。

みとりはその麦わらを柔らかくするために用いられた。



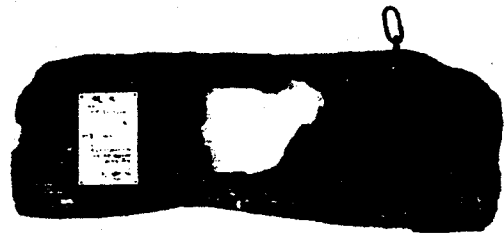
みとり



ねこぐるま

**猫車**

一輪車で、坂道や狭い道を通る時便利なように車輪の大きさ、荷台の曲線などを配慮してある。



ばんぎ

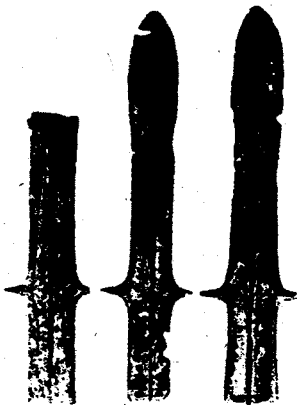
**板木**

明治14年より明治20年頃職員室の前の廊下につるしてたいて時報を知らせた。

(善通寺市立西部小学校提供)

**銅剣**

弥生時代の青銅製利器。柄(つか)部が筒状の矛(ほこ)に対して、柄部に短い茎(なかご)のあるものをいう。古くは細形銅剣のように実用的なものであったが、国内で鑄造されるにつれ、平形銅剣のような非実用的な形へと変化した。この平形銅剣は市内与北町陣山から良多三郎さん(故人)が発掘したものである。



陣山の平形銅剣

|             |       |      |    |          |
|-------------|-------|------|----|----------|
| 1894年(明・27) | ごろ    | 銅剣   | 7口 | 有岡南原     |
| 1897年(明・30) | ごろ    | 平形銅剣 | 2口 | 善通寺町     |
| 1918年(大・7)  | 5月27日 | 細形銅剣 | 5口 | 善通寺町瓦谷   |
| 1918年(大・7)  | 5月27日 | 平形銅剣 | 2口 | 〃        |
| 1918年(大・7)  | 5月27日 | 狭鋒銅鉞 | 1口 | 〃        |
| 1934年(昭・9)  | 3月12日 | 平形銅剣 | 4口 | 吉原町我拝師山麓 |
| 1939年(昭・14) | 5月19日 | 平形銅剣 | 1口 | 〃        |
| 1942年(昭・17) | 3月    | 平形銅剣 | 3口 | 与北町陣山    |

## 銅鐸(どうたく)

弥生時代の青銅器で梵鐘を偏平に押しつぶしたような筒形で、上部から下部にすそ広がりになる。頭部に半円形つまみをつけ、そこから身の左右両側に帯状のひれがある。昭和140(1965)年我拝師山麓で菅昌彦さんによって発見されたこの銅鐸は二区横帯、流水文の文様で高さが29.5センチで、現在は文化庁に保存されている。

なおこの銅鐸と同範囲係銅鐸が大阪府豊中市大字桜塚原田神社境内から出土しており、昭和50年には大阪府東奈良遺跡で本銅鐸の鋳型が発見された。



我拝師山の銅鐸(どうたく)



# 神谷神社

## 祭神

火結命 <sup>ヒノムスヒノミコト</sup> 一座  
 奥津彦命 <sup>ウツノヒコノミコト</sup> 奥津姫命 <sup>ウツノヒメノミコト</sup> 二座

## 相殿

経津主神 <sup>ツルギノヌシノカミ</sup> 武甕槌神 <sup>タケノコノミコト</sup> 四座  
 天岩屋命 <sup>アマノイワヤノミコト</sup> 姫大神 <sup>ヒメノオホカミ</sup>

## 事績

御祭神火結命は、伊弉諾・伊弉冉二神の末子として生じ給い、火の性情を具現し給う神である。土の精霊塩土山姫の神を娶って、五穀・養蚕を司る大年神を生み給う。大年神は雨の精霊天加流美豆比賣の神と婚じ、奥津彦・奥津姫の二神を生み給う。この二神は寝所を穿ち薫を染いで煮炊の業を広め、火を司り給う神である。

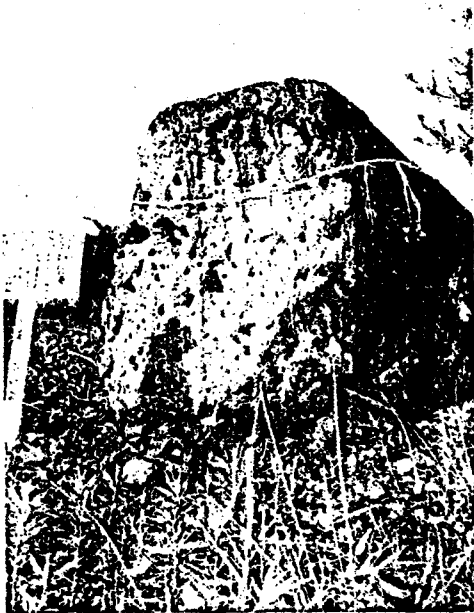
相殿に祀る経津主神・武甕槌神は葦原の中国を平定し給い、河神也。常陸の鹿取・鹿角に祀られ、天岩屋命は天照大神天の岩戸に入らせ給うとき、神託をそのべて大神を岩戸よりお出申上げ、のら皇孫瓊瓊杵尊に随従して豊原瑞穂の國に降り給う大神である。伊勢より来臨の姫大神と併せこの四神は奈良春日大社に祀られている神である。

## 由緒

神谷神社の創祀は、太古、神々がこの溪谷に集い遊んだところからこの地を神谷と云い、また自然居士改る人がこの川瀬に忽然と現われ、傍の大岩を祭壇として天津神を祀つたとい傳えられているが、この附近からは弥生時代の石鏡・石斧・土器などが出土し、神社の裏には影向石と呼ばれる磐座がある。

その祭記が古代に創ることを物語っている。弘仁3年壬辰年嵯峨天皇の御代、阿刀大足(弘法大師の叔父)が社殿を造営祭祀し、併せて春日四神を相殿に勧請し奉ったといわれ、車親7年冬10月9日従五位上、貞観17年戊申正五位下(三代実録記載)の叙位があり、延喜5年には國司班幣の神として延喜式神名帳に記載(延喜式ぬ社)されている。その後も度々叙位あつてか建保7年建立の現本殿棟木には「正一位神谷大明神」の墨書銘がある。

かくのごとく古来より郷人は三ヶ庄(松山・林田)の総氏神として崇め、五社大明神・清藤社とも呼んで、その奉事には舞樂上納・大般若經の転讀などが行われ、また武門の崇敬も厚く、在官刑部正長は建保7年2月10日に本殿を再建(現本殿)貞治年間日奉山下に降した細川清氏は神号扁額を奉納。讃岐の守護細川氏も社殿を修理増築あるいは祭田を寄進。その臣安富・香西氏は神前に連歌を興行して奉納するなど、宝物として今に存するものも多く、その崇敬のほどを偲ばせている。





## 木造隨身之像 (重要文化財)

巾子冠（ひんすけ）をいたゞき、開眼の袍を着用。両臂を外方に振つて持物を執る姿の阿・吽一対の隨身像。全国でも珍しい之像である。

像高、<sup>うらぐ</sup>木櫃の檼出でつゝ、ら小に体部に頭部と両袖を彫り分け、内割りの深い特殊な奇木造である。子突の面相や深い衣褶の彫りほ力強く、本殿造りの頂に近い鎌倉初期のものと考えられる。



## 神谷社法衆連歌 一巻 (坂出市文化財指定)

明応5年2月 神谷社前で興行された賦三字中略の百韻連歌で、鳥ノ子紙半折4枚に記されたものを一巻の卷子装とされたものである。連衆は宗堅・宗高らと29人で、その中には元衆・元親・元資らと安富・香西氏と考えられる名も見えて、在地の武家集団を中心とした興行と考えられる。歌は書式を守って記載された讃岐に於ける初期のもので、果下には最古の連歌である。

## 舞楽面二面 (坂出市文化財指定)

舞楽は奈良・平安時代に朝鮮・中国・印度から伝えられたもので、宮廷や社寺の主要な行事のとき上演されたものである。

当社に蔵するものは抜頭・還城楽の二面で、抜頭面は頸部を破損しているが高さ29釐、勇壯な面相と筋肉の盛上りに写実性がある鎌倉時代の作で、還城楽面はその描写がやゝかたいが室町初期の優品で、なお、舞楽に使用した振子や鼓胴もある。果下に数少ない舞楽面で、鎌倉・室町時代に白峯を中心とした盛んであった讃岐地方の芸能文化を考える上からも貴重なものである。

## 大般若経六百巻 (坂出市文化財指定)

縦24.5釐、横15.5釐 一巻一冊施風葉に綴られた写経六百巻で、黄麻紙を用いた半丁に1行17字で9行が書かれている。書体・形式から見て鎌倉末期に写経僧教名によって書かれたものと考えられる。六百巻の中不足を補ったものが3巻あり、これには享徳6年・文明13年の書字銘がある。

## 神号扁額 一面

高さ57.5釐、額面の周囲に花形の繰られた縁を付いた松材神号扁額である。

る。額面に「神倉大明神」の文字とこれを囲む方形の圈および額縁の花形や隅には金銅板を鋳造して打ち付けられている。貞治年間、南朝の將細川清氏が白峯山下に在陣のとき奉納したものと傳えているが、その形状・工作法などから鎌倉末期のものと考えられる。

## 木造狛犬 一対

前足を直立して高く蹲踞した高さ2.2m程の小形であるが、尻尾が非常に長く頭から首にかけて密着し、背は骨格を精巧に彫出してやせした躯体を現した古式のものである。神殿内神座近く置かれたと考えられる。鎌倉時代の珍しい狛犬である。

## 影向石<sup>いかり</sup> (磐座)

社殿の裏側の末、神倉川の傍にある巨巖で、古代神倉社が建立されたまゝで、この巖が神の依代として示された磐座で、古代祭祀の址である。

## 石造層塔 二基

社前広場にある凝灰岩製の七重層塔は中世この社の神宮寺であった清龍寺のもの、上部を失っているが高さ2.5mあり、塔身には仏像形と梵字が彫られている。坂出市内には白峯寺十三重塔とついで石造多層塔で、その形体から室町時代のものと考えられる。

## 経塔 (地神社) 一基

社殿の埵外右にある六角の石塔で、現在は地神社として祀られていたが、もと清龍寺にあった経塔と考えられる。よく旧形をのこしており、鎌倉末期のものと考えられる。

## 残念石・一字一石経塚

参道にある護国神社の裏にある。径ノ赤余の岩の上面にノビ割と所カ下ノ  
様ありあり、天正6 長宗我部某攻の時根箱世人と1尺軍兵をくま野の防  
子神社に近づけ返りつたため、軍兵は残念の余りこの石を切つて退散したと伝  
え、残念石と呼ばれてゐる。

また塚状の石積みは、疫病などを防ぐための扁平な川原石に経文を一字づつ書  
字に埋め込ませた経塚で、今も時にその経石を見ることがある。



# 綾松山・白峰寺・洞林院

五色台は、黄・白・紅・青・黒の、五色の峰から成る台地也。その一つ印峰にあつて白峰寺といふ。(四國集8 / 播磨所)

白峰寺七棟門は、高麗門形式也。7つの棟をむつめおらしき扉重門を当寺の正門。境内にはいふと右に御成門があつて、各殿・庫裏の建物が見え、左側休憩所、茶室、納経所の前を過ぎると大樹のうしろと広い境内に、御堂も多い。正面勅額門から模範寺殿、門前を右折して石段を登れば鐘樓を経て本堂に至る。本堂は千手院(後醍醐天皇勅願による。)とむいひ、本尊は智証大師作といふ千手観音菩薩像をまつる。右の方に阿彌陀堂(千体阿彌陀仏。建物が祟文化。)、右の大師堂、行者堂(役の行者)、その下に兼師堂、さらに不動堂、地藏堂、池の中に商王堂が堂宇を改らべ、宝庫や土蔵造りの宝物館もある。

模範寺殿は、崇徳上皇の御廟所也。印峰寺の付属仏堂に改り、その裏の円墳の白峰御陵には悲運の崇徳上皇を祀る。

いほの金堂(兼師如来)は松平頼重が寄進(1792)、阿彌陀堂は、松平頼重が修理。本堂は、慶長6年(1599)生駒一正が再建した。表参堂のとらゆうくに三重塔(一柱重文)があり、左の石塔には弘治元年(1578)の字が、右には元亨元年(1321)の字が見える。勅額門の模範寺勅額は後小松天皇が、応永二年(1415)に奉納したものである。現在の勅額門と模範寺殿は(延宝8年(1680)藩主松平頼重が再建した。明治初年勅使が下向して御影を京都の白峰神社に奉遷してから、上皇宸筆の六字名号を御遷代とし、右に念持仏十一面観音、左に白峰相模坊大権現をおまつりしてある。

崇徳上皇崩御のあと、仁安3年(1168)の秋、西行法師は西國行脚のとらゆうここに詣りて一夜法施して御靈を収めさすのに、この化鳥を呼び「何ぞはやく重盛の命を奪つて、雅仁清盛をくるしめざる。かの警敵ことごとく此河の海に尽すべし」と、その御声は谷や峯と遠く響き渡る。西行は魔道の浅ましきを見ず涙を流し「よしや若むかしの玉の床とくも、いかに人後は何れかはせん」と声高らかに

にたえんが、反叛御霊はいえんが。やがて昇平・治承の戦いあり、多くの公家  
・武將が内海にたえんと消えたりはたへんがといふ(「兩月物語」より)。  
寺には西行法師腰かけの石あり、上に法師の石像をまつる。

民家の博物館

# 四國村





ながれ坂(瀧 政之作)

## 四 國 村

四國村は昭和五十一年、高松市屋島の南山麓に開林して「四國民俗博物館」の  
発祥である。この林の面積は約27,000平方メートルあり、ここには四國各  
地から採集した地方色豊かな建築が残り、当地民の生活を知らぬ道具や什器など  
数多くの民具が展示されている。村内には四國の神境祖伝のあずら橋や小豆島の  
犬玉取石で築いた道路や広場があり、季節の表化を示す数多くの木々が植えられ、  
周辺の自然環境を巧みに取り入れたいエニワの民俗博物館である。

### 小豆島の農村歌舞伎舞台 (文久三年(1863)以降)

旧所在地: 香川県小豆郡土庄町小部甲664

この舞台は小豆島にあり、小部部落が所有してゐた。建物は間口六間(11.87  
m)、奥行四間半(8.91m)、寄棟造、かやぶきで、裏に一間半通りの横瓦ぶ  
きの下屋が四間半にわたってつく。前面ではかや屋根を切り上げて横瓦ぶき瓦こ  
してゐる。中央の廻り舞台は直径4.72mある。向つて右手にテボのユカ、右  
手下にお雛座があり、裏の下屋は兼座になる。この建物には落書がいくつもあり、  
そのなかには「文久三年八月御祭禮」としてあるものがある。舞台の前方は広  
くひらけ、石垣を築いた円形の階段式段敷が設けられている。

農村歌舞伎舞台は四國の村々に広く分布してあり、村人は祭のさいには激しい  
労働から開放された歌舞伎に興じ、明日の活力をやり取った。

### 旧山下家住宅 (18世紀末)

旧所在地: 香川県大川郡白鳥町五名1440

この家は香川県の東端、徳島県境に近い山腹にあつた農家である。間口四間半  
(8.91m)、奥行二間半(5.01m)、寄棟造、かやぶきで、前面が土庇に改

っている。向って右半部が土間、左半部が床張りで、奥のすみに寢室一室を圍つただけの葦林の間取りである。深も細く、構造も簡素である。

讃岐平野では江戸時代後半にはかやぶきの屋根の周囲にかぶきの庇をめぐらして、大蓋、四方蓋とよぶ形式が多くあるが、この家ではかぶきの庇が短く、かやをかきおろしておろ古風である。

## 旧河野家住宅 (18世紀中頃)

旧所在地: 愛媛県上浮穴郡小田町上川乙96

この住宅は南予の山間部にあつた。間口六間半(12.62m)、奥行三間半(6.74m)、茅棟造、かやぶきで、棟に小さな破風をつけ、入母屋造のように見せかけている。間取りは横二間取で、土間と二部屋から成る。土間には和紙の原料であるこうやみつばたを蒸す大カマがある。床上の二部屋とも竹座で、その水かきにイロリが切つてある。この間取りは四国山間部によくみられるもので、旧下木家にも類似しているが、この家ではチャノマは表から奥まで広がる細長い一室で、旧下木家のように奥を区画してはいない。また、チャノマ前面が開竈的で小さな格子窓だけである点、ザシキ前面に縁側を設けている点なども違つてゐる。

## 石砂磨じめ小屋 (19世紀)

旧所在地: 香川県坂出市材町298-2

この円形の珍しい建物は坂出の農林にあつた。腕木を以いて、白のまわりを牛がまわつた。砂磨きびをしぼつた。このため建物は円形につくつた。建物は径5m、かやぶきの円すい形の屋根をかける。柱はツノ木で、正面入口の扉のほか、小さな下地窓をあげるが、全体が大壁を塗りこまぬ。内部は梁を井の字形に組み、手本のサスを用いて、唐笠のような構造に取つてゐる。

白でしぼつた砂磨汁を白きしめると黒砂磨が出来る。かよど小屋も横へ復元さか

る予定である。

## 南予の茶堂 (嘉永6年(1853))

旧所在地: 愛媛県北守和郡大見町川上ノッポ

この茶堂は大見町川上組が所有していた。間口二間(2.93m)、奥行一間半(2.95m)、寄棟造、かやぶきの建物で、向、右半部は土間、左半部は床張りで、この奥に祭壇を設け地藏菩薩を祀る。土間、床張りの部分とも芋縁天井を張り、祭壇以外は壁をつけず吹放ちと仮る。地藏菩薩は流政之氏作で、瀬戸内寂聴尼によつて開眼した堂は、「遊庵」と命名された。この堂の柱や天井板に四圍薬場をめぐつた廻路板らが書きのこじりとあしめられる落書がある。年号をしるしに最も古いものは嘉永六年であるから、この堂はこれ以前からあつたことがわかる。

茶堂は四國西部の村々に広く分布している。方一間のものも多く、四本の柱をめぐつて四つ足堂ともよばれる。弘法大師、大日如来、兼師如来などの像を安置し、村人の信仰の場であるとともに、夏には村人や道ゆく人に抹茶の接待もする。

## こうぞ蒸し小屋 (19世紀)

旧所在地: 高知県高岡郡檜原町越智面東方2320

この蒸し小屋は和紙の原料となるこうぞやみつまを蒸すための建物で、間口二間(3.77m)、奥行三間(5.56m) 寄棟造、かやぶき、竪入で、壁もかやで囲つてある。中央に大きなカマドを築き、その上には大桶のフタがつるこがある。大桶を上げ下げする装置がついている。

かつて四國の山間部ではこうぞやみつまの栽培が盛んで、和紙をふいた。

## 旧下木家住宅 (安永10年(1781))

旧所在地: 徳島県美馬郡一宇村林木地屋ッ

この家は剣山地の北斜面、一宇村にあった山形農家である。間口七間(14.0m)、奥行四間(7.9m)、寄棟造、かやぶきで、前面に土蔵がつき、東側に杉皮ぶきの下屋が付属する建物で、棟札に「安永十辛丑三月吉辰日」としてある。間取りは向って左側に二ワ(土間)、中央に板張りのナイシヨとナイシヨノオク、右側にやはり板張りのオモテを配している。ナイシヨとナイシヨノオク境は中央に柱が一本立つが建具のないことが間取りの特徴である。太い梁を一間間隔くばり、上半部を細くこきおとし尻コキバシラとよぶ柱が梁をつらぬいている。この特殊な構法は剣山地方の江戸時代後半の民衆くみらぬ特徴であり、旧下木家住宅はこの構法をもらい伝早い例である。

二ワは作業の場で、大ガマや唐臼がすえてある。ナイシヨにはイロリとカマドがある。炊事、食事をし、またイロリの明りをたよりに夜なべをもじり、ナイシヨノオクは寝室にあまらぬ火とおもわれぬ。オモテには仏壇、物入れがあり、お客の部屋にあてられたが、家族が多いときには居間や寝室としても使った。太い梁を組んだ空間構成は力強く、魅力的である。

## 米つき小屋 (模型)

旧所在地: 徳島県美馬郡一宇村

この米つき小屋は地元ではさうす唐臼と呼んでいる。間口2.15m、奥行2.02m、切妻造、かやぶきの檼造小屋。いまではこのような小屋を、バツツリ、バツツリと米をつくのどか山形村風景は鬼かけ飯く飯つてしまった。

## 旧中石家住宅

主屋 (19世紀前半)  
納屋 (19世紀末)

旧所在地：徳島県三好郡東祖谷山村表生土194

この家は平家落人伝説で名高い祖谷山に立つ尺山村農家で、主屋、隠居屋、納屋の三棟が移築された。三棟とも寄棟造、かやぶきである。主屋は間口五間半(10.7m)、奥行三間半(6.9m)、隠居屋は間口四間半(8.7m)、奥行三間(5.5m)。間取りはともくうちとオモテの二部屋から成る二間取りで、土間を設けられ、コキバシラを用いていることは旧下木家と同様である。納屋は間口四間(7.6m)、奥行二間(5.9m)で、東半部は半地下をつくり、畜舎とし牛を飼つた。西半部は物置で、床、天井が張つてある。

主屋、隠居屋、納屋の三棟が等高線にそつた細長い敷地に垂直する配置は四國地方山間部で、かつては多くみられたが、現在は寸寸と狭くなる。中石家のもとの敷地は傾斜が特に強かつたので、隠居屋は主屋背後の一段高いところに別な敷地をつくらせた。

## 旧丸亀藩米蔵

(寛政8年(1796))

旧所在地：香川県丸亀市西平山町107

この米蔵は丸亀藩のものだが、移築前は黒瀬家の所有であった。間口九間(17.22m)、奥行四間(8.25m)、切妻造、本瓦ぶき、漆喰塗、腰をなす壁とし、大規模な建物である。内部は四室に分かれ、それぞれ前面に片庇のついた入口がある。内部は天井が低く、屋根裏がそのまま見えている。柱の間の壁には丸太をこまかくはり、床板を積んで壁がはたまた古い工夫がみられる。

もう二百年近くもこの米蔵が保たれて、白漆喰、腰壁、出入口、窓のデザインにはモダンなものを感じさせる。

## 水切土蔵 (明治時代)

旧所在地 高知市布師団1986

この土蔵は高知の農家(前田家)にあった。間口二間半(5.20m)、奥行二間(4.34m)、切妻造、檼をぶきで、前面に幅一間半(2.97m)、出二間(3.67m)、入母屋造、檼をぶきの番屋が接続している。土蔵は内部が二階に建てられている。雨の多いこの地では、壁に木切りの小さな屋根を三段に付け、腰をなまこ壁とシテ、壁を雨から守っている。屋根を茅屋根で、土蔵部分とは切りはなしてある。この土蔵は高知の木切土蔵のなかでもデザインがすくなくものが一つである。

## 旧丸亀藩番所 (19世紀)

旧所在地 香川県三豊郡豊後町其浦甲46

丸亀藩西端の其浦にあり藩の番所と伝えられる建物であるが、移築前は住宅として使用されていた。間口五間(9.81m)、奥行二間半(4.95m)、寄棟造、本をぶき、前面に本をぶきの庇をつけて土庇としている。のちの改造のため移築前棟は間取りに変わっていたが、当初の姿に復原すると、向って左側が土間で、中央部に三部屋、右側に二部屋があり、あわせて五部屋からなる間取りであった。中央部の二部屋は壁で囲まれた閉鎖的の部屋で、一般の民衆には見られぬ形式の間取りである。

## 旧吉野家住宅 (19世紀前半)

旧所在地 徳島県海部郡由岐町伊原利2

この家は徳島県の蒲生田岬に近い漁村伊原利にあった。太平洋の荒波をうける山がちなこの地は、交通の便が悪く昔は陸の孤島といわれる。間口三間半(7.04m)、奥行三間(5.96m)、切妻造、をぶきの小規模な建物である。向って左側に土

間をとし、土間にその幅一間の竹スノコ床をいかけ、奥の畳敷の座敷と寝間をとっている。

軒が低く、忍ぶきであるのは、風が強い土地柄のためである。敷地の海側に風よけの石垣を築いた家が多い。この家にみられる間取りは付近の農家や町家と大きく異なる。ここは古い。





# 高松城

讃州讃岐の高松様の城も見えます。波の上で詠われた高松城は秀吉家臣生駒親正が天正十六年(1588年)築城した。親正は秀吉幕政下三中老の一人で秀吉とよく通じ秀頼を良く補佐した。

とがし、関ヶ原、大坂冬、夏の陣を経て江戸時代元和七年(1621年)三代高俊の時、生駒騒動を起して讃岐十七万三千石を召上げられ、出羽矢島一万石に物封。変って寛永十九年(1642年)常陸下食官から松平頼重が入封。頼重は水戸黄門(光圀)の実兄で名君として知られた。

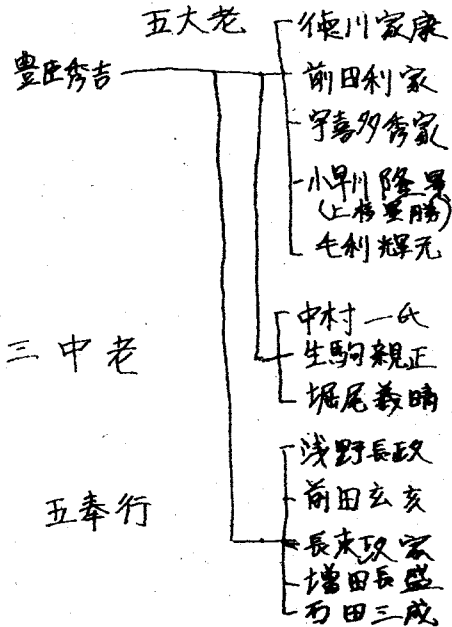
高松城は日本三大水城の一つで、その美しさから玉藻城の別名もある。

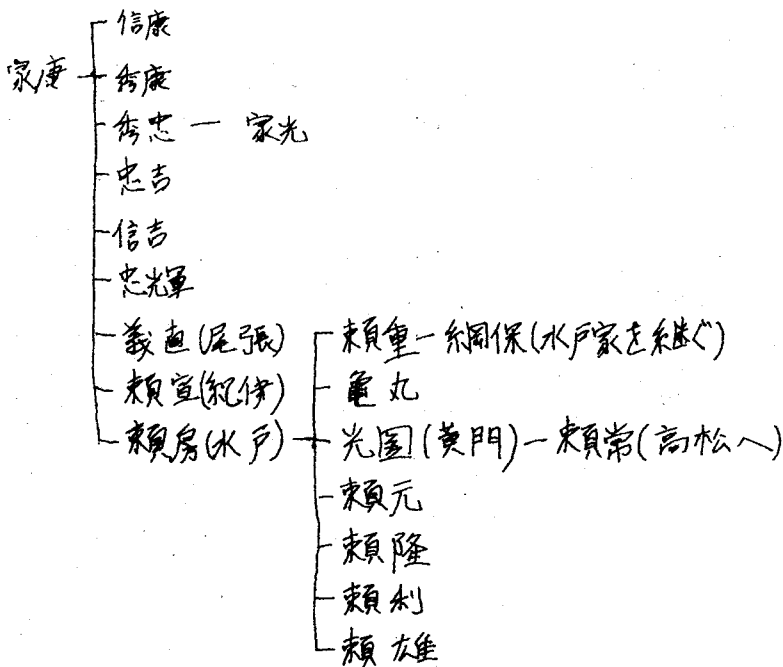
## 建築

- 北丸月見櫓 (三層三階 延宝四年1676年)
- 北丸水手御門 (初期江戸時代 薬医門)
- 北丸渡櫓 (一層一階 寶文五年1665年)
- 旧東丸長櫓 (三層三階 初期江戸時代)

築城当時、高松は笠原と呼ばれていたが、笠原と原野を意味するとして嫌いな高松と名付けられた。

## 大関幕下の政治形態





### 栗林公園

城下の南の園地として生駒氏の別荘跡に作られ其の後 歴代藩主が本を和え庭園として江戸城吹上御所の回遊庭園としてその美しさは日本三大庭園の一として上げられている。

## 女木島 (鬼ヶ島)

高松の沖合四KMの海の上 通称鬼ヶ島、鬼が住んでいたと思われる4丈板の洞窟、大広間、居間、婦女子の監禁室、湯井戸の跡、番人の控室と広さ四千平方M、奥行き四・五十Mに及ぶ。

高松市鬼無町伝説発祥の地 桃太郎、犬、猿、キツの墓、お伽話は室町時代に出た。

### 桃太郎伝説

吉備津彦命を祀る吉備津神社(岡山市)

一説によるとこれは男女の夜話を面白おもしろくしたこ

お母さんお川に洗たくさ (お産津)

お娶さんは山に柴刈りに (薪でお湯をわかす)

で始まる男と女の夜のいとまみ---



# 史蹟・天然記念物 屋島

## 概観

屋島は現在、半島であるが、17世紀ごろまでは現在の牟礼町王墓あたりから、高松町、屋島西町の南端、新田町を経る木太町の北部から今橋あたりまでが海であり、島であったことは寛永10年(1633)頃に讃岐國絵図に描かれている。その海面を江戸時代に埋め立てたため陸続きと変わった。この後、正保4年(1647)に当時の藩主松平頼重がこの埋立地を東西に切り開いて相引川を作った。その後寛文7年(1667)には今の松島町から淵元まで、宝暦年間(1751~1764)には北方の西側を埋め立て、塩田を造ったから、ほぼ現在の地形と変わった。

(指定日: 昭和9年11月10日)

## 地質、史跡

瀬戸内海火山賦の特有溶岩として知られ世界的に稀な古銅輝石安山岩より成る南北に長い溶岩台地で遠望は屋根状である。頂上は平坦で周囲に絶壁と取らり、地形上「メサ」(卓上岩石)の標型として多くの教科書の挿図と取らっている。

頂上に近い所に露出する通称「壘石」は板状節理の標型として有名である。

また、屋島の一角は史跡も多く天智天皇6年(667)頃外敵防備のために築かれた朝鮮式山城である屋島城や山上には唐僧鑑真の創建と伝えられる屋島寺がある。

壽永3年(1132)安徳天皇を奉じて平氏と、源氏が合戦をくりひろげた古戦場としても知られている。

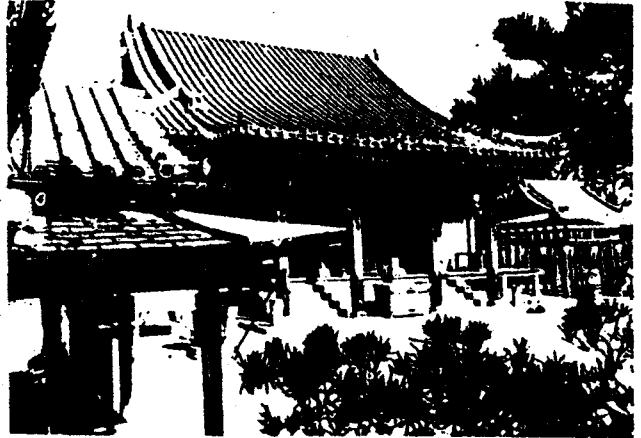
## 屋島寺

真言宗御室派南面山千光院。本尊十一面千手観音坐像。四圍遊場第八番札所。開基は奈良時代の末に采朝した中国の高僧鑑真といわれ、その弟子恵要律師が北側に堂を建て最初の住職と取らった。

空海(弘法大師)は伽藍を南嶺の現在地に造営し、平安時代の初めには山岳仏

教の聖地として栄えり。

五周五面の入母屋造り、本瓦葺の建物である。元和4年(1618)に住持竜藏によつて再建され、桃山様式の建物であるといわれていたが、昭和22年(1947)2月からの解体修理で、斗拱(建築物の柱上にある軒を支える部分)が鎌倉時代の比例をもち、軒支輪や格天井の蛇骨子の曲線、強い反りのある重木、縁末に約分の面取りのあることなどから鎌倉時代末期の建物であることが明らかとなり、黒漆と丹塗の美しい鎌倉様式の建物に復元再興された。本尊、梵鐘とともに重要文化財に指定されている。



書院の裏庭には白い凝灰岩が露出し、「雪の庭」と呼ばれている。

### 屋島城跡

高松市屋島東・中・西町にまたがる屋島にある古代の朝鮮式山城跡。「日本書紀」天智天皇6年(667)11月の条に、「讚吉國山田郡の屋島城を築く」とある。当時、日本は百濟復興を支援し朝鮮半島に進出したが、天智天皇2年(663)白江の唐・新羅連合軍に大敗。対外的な危機意識が高まる中で、天智天皇は北九州から瀬戸内を経り大和に至る要所に築城して防衛力を強めた。築城には朝鮮半島からの渡来者の指導があったという。屋島は、その名の通り内海に浮かんだ屋根型の島である。南・北嶺の山頂台地は標高280m前後、切り立つ崖に囲まれている。その天険の地勢を最大限に利用して築かれたが、山頂部に山城遺構は見当たらない。西麓の海生から二つに鑑真ヶ谷の山腹に石塁跡がある。谷川に直交して約40m、基部幅10m、高さは外側2.5m、内側2.2m石塁北側の台状部を櫓跡。その付近を櫓の内と呼ぶ。南側斜面にも石列があり、櫓跡から1.20mの間を防く形をとる。

## 屋島の古戦場

「平家物語」によると、泰永2年(1181)平家一門は都から屋島一帯に逃れ来  
て、平礼六万寺を行在所と定めている。合戦の行われたのは、その翌々年の文治1  
年(1185)2月18日から19日にかけてである。阿波勝浦(現徳島県小松島市)  
に上陸した源義経一行は、一気に屋島に進軍し、両軍の間で戦闘が行われた。  
巻ノには「経信最期の事」、「那須子一の事」、「弓流しの事」、「志度合戦  
の事」し、それぞれ描かれている。これらの話に基づいて屋島の古戦場跡は  
整備されている。古戦場跡は、高松市、木田郡牟礼町・庵治町に接するあたりに散  
らしているが、大きく分けて三つの地区に分けることが出来る。第一は牟礼町で、  
琴電八栗駅前側の新旧の国道の間の場所。王墓の古墳の南側に隣接して「佐藤経  
信の墓」、「佐藤氏念祖碑」、「大夫黒の墓」、「鎌田兵衛尉殿塚碑(鎌田光政の  
墓を推定する碑)」などが一帯を設けて整備されている。これは、昭和6年(1931)  
に経信の世の孫である山形県人佐藤信古が、遺跡に大修理を加えて墓地  
公園にしたものである。第二は琴電八栗駅の北側、旧庵治街道に沿った部分であ  
る。この地区には、「平家松門跡」、「林若島(佐藤経信戦死の所)」、「義経の  
弓流し」、「那須子一の駒立岩・祈岩」、「洲崎寺」などがある。このあたりは、  
源平が互いに戦闘を繰り返した場所とされている。第三は高松市屋島東町の檀  
ノ浦にかけての場所である。六万寺に行在所を構えていた平家や、源氏の来襲の  
ための対岸の屋島に行所を遷した所とされている。遺跡としては「安徳天皇社」、  
「佐藤経信碑」、「新王外墓」などがある。これらの遺跡は、源平の合戦後間も  
長い間から、人々によって語り継がれ守られてきたものである。その大部分は江  
戸時代に入って、高松初代藩主松平頼重によって整備された。

## 屋島長崎古墳

高松市屋島両町長崎、屋島北麓の小丘上にある古墳時代前期の竪土前方後  
円墳。墳丘は略測値で軸長46m、後円径28m、前方部長32m、幅19m、  
後円部は葺石を敷いた段に葺いていくようにある。



# 香川県文化財地図



— < メ モ > —

宿泊先 香川県 坂出市 高屋町 東山 2048-91

坂出簡易保険保養センター

☎(0877)47-0531

編集 備陽史探訪の会事務局

〒720 広島県 福山市 多治米町 5-19-8

☎(0849)53-6157

